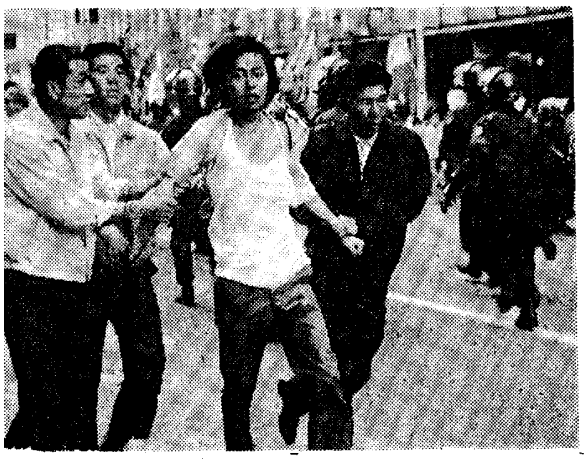
6・15集会 ルポ

注目される共闘方式

15日 全国で二三人が逮捕

今年の「反戦・反安保・沖縄闘争勝利六・一五統一集会」は全国二九都道府県で約六万人を集め、東京でも反日共系学生、反戦青年委員会、市民など三万人以上が参加した。日比谷公園から国会議事堂わきを経て銀座、東京駅八重洲に至る約二㌔のデモコースは、色とりどりのヘルメットや旗、人波で埋めつくされた。先頭の市民団体が午後五時過ぎ目的地の東京駅に着いた頃ようやく最後尾のべ平連などが日比谷を出発し始める程であった。一方、このデモに対して機動隊による過剰の警備体制に抗議の声が高まっている。当日東京では吉川勇一ベ平連事務局長ら七二人が公安条例違反などで逮捕され、全国でも二三三人にのぼる断準者が出た。



六月十五日は梅雨に入ったにもかかわらず、くまなく澄み渡る青空が広がっている。

日頃眠わう駿河台周辺も静まり本学周辺は今日の日比谷集会にむけ学館前・本館中庭で諸団体が集会を開催した。本館中庭には約五〇〇人の学生が「明大ベ平連」、「闘法連」、「日本史」などのさまざまの旗のもとに集まっている。クラス・ゼミ・サークルから多数参加し、いつもより結集人員が多い。学生会館前では全中闘（中央大学全学中央闘争委員会）続いて本学学生会中執（社学同統一派）、本学学苑会中執（解放戦線）が次々と集まって集会を開く。

今日の会場の日比谷公園入口でまず自につくのは戦闘服で身を固めた機動隊員が両側にならび、眼みを利かして角材などの〝凶器〟を没収すべく検問をしている姿である。

カンパ、ベ平連の「週刊アンポ」の発売員のうしろの芝生には家族連れの学生、労働者、市民団体の人々が続々とつめかけた。公園内には赤・黒・緑などの様々な色彩の旗が揺らぎ、角材姿ほとんどみられず、旗の数は多数の参加人員の証左でもあった。

野外音楽堂では午後一時四十分から「反戦・反安保・沖縄闘争勝利六・一五統一集会」が開催され、ベ平連、各市民団体と反日共系全学連各派反戦青年委員会をはじめとした約七万人（主催者側発表）が参加した。

ベ平連代表の小田実氏の「さまざまな形態のたたかいが一つにまとまり、権力に立向かおう」とのあいさつなど各団体からの連帯表明がなされた。午後二時四十四分あいさつが続けられていた途中、突如逮捕状の出て以来地下に潜行しながらも執拗に活動を続けている東大全共闘山本義隆代表が、厚い警備網を突破して会場に到着したと発表がなされた。会場はわれんばかりの拍手に湧きに湧き、東大全共闘が演壇上を陣取った。黒ヘルの一群が演壇に向けて疾進してくる旗で囲いをつくり、満場の拍手のなかを山本代表が表われ、約十五分間の激励を終えてそのまま何処へとなく姿を消し去った。

三時半、ベ平連を先頭にデモ隊は出発した。霞が関―虎ノ門―新橋―銀座―東京駅、のコースである。公安委員会に許可申請した国会コースを一方的に変更され、付帯条件もつけられたなかをベ平連―各大学ベ平連―反戦青年委員会―各大学全共闘―フォークソングゲリラ無所属の順でデモ行動する。出発口を反戦青年委員会デモが出ようとした時、機動隊が突込み、ジュラミン棒で突いたりして暴行を働き、デモ隊を分断した。国会近くを通過するときは約七列幅の機動隊の狭義包囲を歩むことを余儀なくされ、ちょっとでもジグザグデモをやると機動隊が規制に乗出し、多数の負傷者をデモ隊に出す。頭をわられる者も出た。コース全般にわたってみると、フランスデモやジグザグデモもやったが直ちに機動隊が出動し機度もデモは分断され、公安条例違反として約八〇人が逮捕された。東京駅八重洲の地点では乗り込みを行ない総括集会を開いて解散した。

労働者・学生・市民約八〇〇〇人は日比谷野外音楽堂に戻り、集会を開いたあと解散した。夜には前治公園でも集会がもたれた。

この日の「六・一五集会」は、六〇年安保以来、多数の市民・労働者・学生が統一集会を開いたことに成果があった。つまり、社・共などこれまでの既成の革新団体の主催でなく、その意味ではラウトサイダー的な組織外のラジカルな諸団体の連合であった。

しかし、二万人以上の人達が結集したものの「これぐらいの人間がいくら集まっても七〇年の戦力にはならない」（警視庁幹部H氏）「二万人くらいなら後楽園球場にも集まる」（機動隊員）にみられるように、決してこれが七〇年の戦闘力にそのままうらえないことである。六〇年安保闘争デモは、岸首相退陣しかその獲得はなく、安保条約、支配体制を継続させてしまった批判から出発した六〇年安保以降の戦いを、来年度に控えた安保改訂期に、いかに対処するかが今後にかせられた問題点である。反日共系の六者共闘（革共同、共産同、社労党、第四インタ、ML、解放）が、四・二八を通じて今度も実現したことは、今後の共闘問題が注目されるところである。